〔大和文華館の中国・韓国絵画展によせて〕

大和文華館の中国絵画

大和文華館の中国絵画コレクションの形成は、昭和22(1947)年、南宋中期の画院画家、李迪の落款を有する「雪中帰牧図」の収集から始まりました。当館の初代館長であった矢代幸雄(1890～1975)は、昭和初年に東京、品川御殿山にあった益田孝(鈍翁、1848～1938)の邸において既にこの作品に邂逅しています。「雪中帰牧図」は、『南都土門本名物集』に記載される室町幕府九代将軍足利義尚から後藤家に下賜された「李迪雉子兎二幅対」にあたると考えられます。江戸時代には彦根藩主井伊家の所蔵となり、さらに茶人、東洋古美術の大蒐集家として知られた益田の所有となりました。

これにつづいて同じく南宋の画院画家である馬遠の落款を有する「竹燕図」(浅野家旧蔵)、毛益筆の伝承をもつ「蜀葵遊猫図」「萱草遊狗図」を、少し遅れて北宋の宗室画家である趙令穰筆とされる「秋塘図」を収蔵しています。これらの内「蜀葵遊猫図」「萱草遊狗図」は、江戸時代には既に日本において対幅として扱われていたことが同時代の狩野派の模本などから知られ、福岡孝悌(1835～1919)の収蔵を経て原富太郎(三渓、1868～1937)の許にあったことが知られます。また、「秋塘図」は狩野常信(1636～1713)が、仙台藩主伊達家から拝領し、後に三渓の収集品となりました。このように当館の初期における中国絵画コレクションは、江戸時代には既に日本に伝わっていたことが確実な宋代の画院周辺の画家の作品をその中核としています。そして、このような傾向は、南宋の「院体画」を高く評価する日本における伝統的な中国絵画観との関わりを予想させます。

中国絵画の日本への移入は、古くは奈良時代以前に遡りますが、平安時代初期には、空海や最澄などの入唐僧によって密教画を中心とした着彩の仏画や白描図像がもたらされました。仏画を中心とした中国絵画の請来は、平安時代を通じて行われたと考えられます。鎌倉時代には、重源を中心とする南都復興集団や泉涌寺の開祖俊芿などの律宗教団、さらに高山寺の明恵上人の周辺に項相などの新しい様式の肖像画を含めた中国絵画が蓄積され、また幕府のおかれた鎌倉周辺にも新たな中国絵画の集積地が形成されたものと思われます。鎌倉時代末から南北朝時代にかけては、黙庵霊淵(1345年頃、元で客死)などの入元した禅僧が、当時中国の禅林において盛んに描かれていた祖師図や散聖図などの禅宗的主題の絵画や墨蘭といった題材の絵画を学習し、水墨画を中心とした新たな中国絵画の流れを日本に伝えました。

そして、室町時代には日明貿易などを通じて、多くの中国絵画が日本に伝えられたと考えられます。その多くは、馬遠や夏珪に代表される南宋時代の画院画家の伝承作品や牧谿に代表される禅宗的雰囲気をもつ水墨画、もしくは、主題や絵画様式において南宋風の強い孫君澤の作品などに代表される元画でした。すなわち北宋の山水画や元・明の文人画といった作品はあまり日本にはもたらされなかったと考えられています。

このような歴史的条件によって室町時代以降の日本における中国絵画観は、主に「日本にある宋元画」によって上記のような作品群を評価するかたちで形成されたとされます(米沢嘉圃「日本にある宋元画」、『東洋美術第1巻 絵画Ⅰ』朝日新聞社 1967年)。

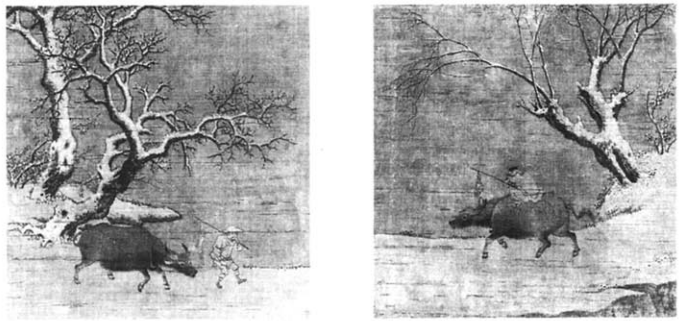
茶人としての活動を通じて伝統的な絵画観と深く関わった鈍翁や三渓といった人々の中で東洋美術に開眼した矢代にこのような絵画観が何らかのかたちで影響を与えているであろうことは容易に想像されます。しかし、一方で矢代と同時期に三渓園において中国絵画に接した洋画家・岸田劉生(1891～1929)が「蜀葵遊猫図」を高く評価したことなど(『劉生日記』1920年11月26日条、岩波文庫)、画家によって作品の表現自体が純粋に評価されるという新たな風潮が矢代の周囲で兆し始めていたことにも注意すべきでしょう。そして、矢代も丹念な作品観察に基づく表現記述を通じて、その様式を分析し、作品の価値を表現としての優秀性によって判断しています。(矢代幸雄「李迪筆雪中帰牧図双幅」、『大和文華』第2号 1951年)。

矢代が、伝統に囚われない中国絵画観を有していたことは「秋塘図」と同時期に以上のような中国絵画観の範囲を超えた故事人物図の優品である「文姫帰漢図巻」(明時代)、さらに、詹景鳳「墨竹図」、程邃「山水図」、張風「賞楓図」等の明清時代の文人画を収集していることからも知られます。日本における明、清時代の文人画の評価は、江戸時代の文人画家などによって既に行われていましたが、近代においては、内藤虎次郎(湖南、東洋史学者、1866～1934)らによる顕彰が研究を深化させたことも知られます。

日本における中国絵画の収集活動は、各時代の様々な歴史的条件や受容する側の嗜好と深く関わりながら行われてきました。そして、日本に伝わった作品を通じてそれぞれの時代の中国絵画観が形成されたと考えられます。当館の中国絵画コレクションは、伝統的な中国絵画観を回顧しつつ、新しい時代相を常に反映した、より広い視野に立って形成されたものと言えましょう。

(増記隆介)

雪中帰牧図 双幅 李迪筆 南宋時代



文姫帰漢図巻(部分) 明時代

季刊 美のたより No.132
平成12年10月 1 日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.